

## 第五章 昔と今

昔とは、現在から時間的に隔たった過去の一時点または一時期のことである。何時とは特定できないが、回想の対象となる過去のある時、現在と対比してとらえた過去のある時である。

今とは、話し手が話をしている時点で、過去と未来の境をなす瞬間である。過去または未来と対比して捉えられるものである。

要するに、「昔」と「今」は対比する時間であり、対照できる時間的な概念なのである。

『古今集』恋歌において、「昔と今」という対照関係に関わる歌は、十一首ある<sup>1</sup>。凡そ『古今集』恋歌の3%の比例を占めているのである。ところが、この十一首の中で、次の四首が典型的である。紙幅の関係で、ここでは次の四首を中心に検討したい。まず、この四首の原文を挙げておく。

① 石上 布留の中道 なかなかに見ずは恋しと 思はましやは  
(古今・恋四・六七九、紀貫之)

② いにしへに なほ立ちかへる 心かな 恋しきことに 物忘れせで  
(古今・恋四・七三四、紀貫之)

③ 月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ わが身ひとつは もとの身にして  
(古今・恋五・七四七、在原業平)

④ 時過ぎて かれゆく小野の 浅茅には 今は思ひぞ 絶えずもえける  
(古今・恋五・七九〇、小野小町姉)

次はこの四首を通して、「昔と今」という対照関係は、恋歌の中でどのような役割を果たしているかを検討してみたい。

ただし、「昔」という時間とは何時とは特定しがたいので、ここでは、(1)

<sup>1</sup> この十一首の歌番号は、六七八、六七九、七一八、七二三、七三四、七四七、七九〇、八〇〇、八一二、八一四、八一八である。

出逢った前の「昔」と、逢ってから「今」との対照表現、(2) 愛し合った「昔」と、別れてからの「今」との対照表現、というように二分して考察してみたい。

### 第一節 出逢った前の「昔」と、逢ってから「今」

本節では、出逢うことを分かれ目として、出逢った前の「昔」と、逢ってからの「今」との対照表現を探求する。

逢う前には、音だけであの人恋しくなるが、二人が逢って、付き合ってから、この恋しさは変化していくのであろう。次はこのような変化および昔と今との対照的問題を、歌の分析を通して考察していく。

#### ① 石上 布留の中道 なかなかに見ずは恋しと 思はましやは

(古今・恋四・六七九、紀貫之)

石上の布留に行く中道ではないが、なかなか(なまじっか)彼女に逢わなければ、恋しいともなんとも思わなかったはずだよ。

以下は、この歌に関わる先行研究を踏まえて、歌意を究明したい。

まずは、「石上」についてだが、この用語は大和国の歌枕であり、『万葉集』以来、「石上布留」と続けて詠まれていて、転じて「ふる」の枕詞に用いたり、「ふり(古・降)」を導く働きをしたり、古いものの象徴としてよまれたり、懐旧の思いをもってよまれたりしたとされる<sup>2</sup>。この歌において、「石上」が用いられたのは、次の「布留の中道」という句を導き出すためであるのにはほかならない。

一方、「布留」は、「石上」と同様に、大和国の歌枕として用いられており、「古」と掛けたり、古いものの象徴として用いられることが多かった用いられたことが多かった一方、「降る」と「経る」にも掛けている<sup>3</sup>。

以上の語釈を踏まえて、「石上 布留の中道」との二句は古くなって過ぎ去

<sup>2</sup> 「いそのかみ」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書 (p 51) を参考したものである。

<sup>3</sup> 「布留」に関する解釈は、片桐氏の同前掲注 34 書 (p 370) を参考したものである。

ってゆくものを惜しむという意を示していよう。また、『全集』によれば、この二句は「次の〈なかなか〉に同音で続く序詞」<sup>4</sup>と見られるという。松田武夫氏によれば、それは「〈なかなか〉にかかる序詞」<sup>5</sup>という。なお、窪田空穂氏は「初二句は、次ぎの〈なか〉に、同音で続く序」<sup>6</sup>と述べている。また、片桐洋一氏は「ここまでが〈なかなか〉を言い出すための序になっている」<sup>7</sup>と解釈している。以上の四つの解釈をまとめれば、この二句は「なかなか」を導き出す序詞として見ては妥当であろう。

ところが、この二句の働きはこれに止まらない。

竹岡正夫氏によれば、「〈ふる〉には古い昔なじみの、〈中道〉には二人の仲という意が掛けられていると解すべきなのである」<sup>8</sup>（傍点は筆者によるものである。以下同）というのであり、小町谷照彦氏によれば、「同音反復の序詞で、映像性はほとんど問題にならないように見えるが、六七九は〈古る〉という雰囲気を漂わせている序詞の部分が昔なじみの仲を暗示している」<sup>9</sup>というのである。

二氏の指摘をまとめれば、すなわち、「石上 布留の中道」との二句は、「なかなか」という句を導き出すという働きをしているのみならず、「石上→布留→古」、「中道→仲」という隠喩関係を通し、「古い昔なじみの仲」という意を語っていよう。

一方、「なかなか」という句について、片桐氏は「いっそのこと…だろう、かえって…だろう」<sup>10</sup>と解釈した。竹岡氏は「いっそのこと、むしろ、かえって、の意」<sup>11</sup>と述べていた。松田氏は「会ったから恋慕の情がますのであってこうなるのだったら、かえって会わないほうがよかったという気持ち」<sup>12</sup>と指摘している。この三氏の指摘を踏まえて歌の構造を見れば、「なかなか」

<sup>4</sup> 小沢正夫等校注・訳、同前掲注 14 書の頭注（p 264）による。

<sup>5</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 307。

<sup>6</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 266。

<sup>7</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 680。

<sup>8</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1373。

<sup>9</sup> 小町谷、同前掲注 7 書、p 232。

<sup>10</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 680。

<sup>11</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1374。

<sup>12</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 307。

という句は、第一句と第二句を受け継ぐという機能だけではなく、第四句と第五句を導き出すという働きも認められよう。

また、「なかなか」一句は、次の歌にも見られる。

東路の 佐夜の中山 なかなかになにしか人を 思ひそめけむ  
(古今・恋二・五九四、紀友則)

友則の歌である。この歌にある、「東路の 佐夜の中山」という語句は、同音反復の序詞として、「なかなか」という句を導くものとされる<sup>13</sup>。また、この歌にある「なかなか」は、「中途半端に…した結果、かえって、なまじっか」<sup>14</sup>という意である。つまり、この歌は「なまじ中途半端な気持ちで、あの人をどうして思い染めたのだろうか」<sup>15</sup>という意味と理解できる。ここにおいて、友則は「なかなか」という一句を通して、「なにしか人を 思ひそめけむ」という後悔の念を表わしたのである。この歌では、「中山」の「なか」と「なかなか」の「なか」とは同音の反復となっており、使い方は貫之の六七九歌に類似していよう。

六七九歌に戻るが、「見ずは恋しと 思はましやは」という語句について、片桐氏は「〈思はましやは〉は〈見ずは〉という仮定条件に呼応、〈やは〉は反語」<sup>16</sup>と解釈した。また、竹岡氏は「実際は見たのに、〈見ずは〉と言っているから、仮定の意が添うて、下の〈まし〉が呼応する」<sup>17</sup>と述べている。なお、松田氏は「会わなかったら、恋しいと思うだろうか、思いはしない、の意」<sup>18</sup>と指摘した。つまり、「見ずは」と「思はましやは」とは互いに呼応していて、「逢わなかったら、恋しいと思うであろうか」という意を表したと見ることができる。

<sup>13</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 500。

<sup>14</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 500。

竹岡、同前掲注 35 書、p 1242。

<sup>15</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 500。

<sup>16</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 680。

<sup>17</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1374。

<sup>18</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 307。

以上に見てきたものをまとめれば、この歌は「石上にある布留との間の中道でもないが、私とあなたとの間の古い昔なじみの仲、いっそのこと、逢わなかったならば、こんなに恋しいと思うもんかい」<sup>19</sup>という意と理解できよう。

さて、この歌の表現法についてだが、「石上 布留の中道 なかなかに見ずは恋しと」における「石上 布留の中道」は後ろの「なかなかに」に関係しており、「二人の昔の仲」を暗示していることについては既に前述した。ここで、筆者が目したいのは、この二句に秘められている「昔」に関する情緒である。このような情緒は「見ずは恋しと 思はましやは」における「まし」という「反実仮想」を表す助詞によって、伝えられている。「昔は彼に逢わなかったら、よかったのに」というように、「昔」に彼に逢ったことを後悔している作者の心情が描かれていよう。

にもかかわらず、「昔」のことを後悔している時点は、むしろ「現在」という時点なのである。「昔」の出会いがなければ、「今」の苦しみが無いであろう。この歌には、「昔と今」との対照が認められよう。作者はこの対照的な関係を通し、「昔の二人の仲」「昔の日々であなたに愛されていたこと」を語ると同時に、「今」の後悔も表しているのである。ただし、今もまだ相手をつづけているので、昔の逢ったことをよく想起し、よく後悔するのであろう。このことから見れば、作者はこの歌において、「今」の後悔を伝えることよりも、「昔の幸福があったから、相手を忘れたとしても忘れられない」という今の無力感と切なさ表現したいものだと考えられよう。

さて、この歌に類似している表現は、六七八の歌にも見られる。

逢ひ見ずは 恋しきことも なからまし 音にぞ人を 聞くべかりける  
(古今・恋四・六七八、読人知らず)

この歌の「逢ひ見ずは 恋しきことも なからまし」という三句は、「逢わないうでいたならば、こんなに恋しいこともなかつたろうに」<sup>20</sup>という意であ

<sup>19</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1374。

<sup>20</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 678。

る。また、三句目の「まし」は六七九歌の「見ずは恋しと 思はましやは」における「まし」と同様に、「逢わなかったら、恋しいと思うであろうか」の意として用いられ、「今」の恋しさを表現するものとして捉えられよう。つまり、六七八の歌も六七九の歌も、「もし逢わなかったら」という仮定を通して、「今」の恋しい情緒を語るものなのである。この二首の歌にはともに作者の「今」の心境が語られていることが認められる。

また、六七八歌の「音にぞ人を 聞くべかりける」の二句は、「あなたのことをうわさとして聞くだけにしておくべきであった」<sup>21</sup>という意であり、あの人と逢った人を後悔しながら、あの人のうわさを聞くという「昔」の時点に戻りたいと作者の心情を語っていよう。この歌に対して、六七九の歌では「石上布留の中道」の二句を通して、「古の仲」すなわち「昔」のことが提起されたことは既に述べた。つまり、六七八の歌もまた六七九の歌と同様に、作者の「昔」のことへの想起を示しているのである。

このように見てくると、六七八の歌は、六七九の歌と同じく、「昔と今」という対照表現が認められ、さらに、この対照表現を通して、「今」の恋しさが伝えられていると認められよう。

次は④の歌の検討に入りたい。改めて歌を挙げておく。

## ② いにしへに なほ立ちかへる 心かな 恋しきことに 物忘れせで

(古今・恋四・七三四、紀貫之)

今の私は、再び昔に立ち返ったような懐かしい気持であるよ。恋しいことについては物忘れをしないものだから。

次は、この歌に関わる先行研究を踏まえて歌意を究明したい。まずは「古に」という句から解釈する。

「古（いにしへ）」について、『古語辞典』で次のように解釈されている<sup>22</sup>。

<sup>21</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 306。

<sup>22</sup> 大野等編、同前掲注 147 書、p 124。

過ぎ去って遠くへ消え入ってしまったことが確実だと思われるあたりの意である。また、奈良平安時代には、主として、遠くて自分が実地に知らない遥かな過去、忘れられた過去などの意に多く使われたが、鎌倉時代以後、ムカシがこの意味に広まって来て、イニシへは古語的・文語的になり、あまり使われなくなったという。

また、小町谷照彦氏は「いにしへ」について、次のように述べている<sup>23</sup>。

「いにしへ」と「昔」とは、厳密には意味の相違を区別するのは難しいが、あえて言えば、前者が過去の時代や時期というような時間的意識が強いのに対して、後者は事件や生活の場としての過去をいう経験的認識に基づいたもので使用の範囲が広いということであろうか。

つまり、「昔」という言葉と比べてみると、「いにしへ」は過去という時間を強く意識しているものであるし、遥かな過去、忘れられた過去の意として使われていることが分かる。この歌の始めには「いにしへに」とあるが、今でも忘れられない過去に戻りたいという作者の気持ちが伺われよう。ここにおいて、筆者はこの歌の持つ強い「時間性」に注意を払いたい。

また、窪田空穂氏は「いにしへに」について「昔の恋仲の意で、その昔といっているのは、今は絶え果てて、単に思い出だけのものになっている意」<sup>24</sup>と解釈している。また、松田武夫氏は「恋仲時代の昔に」<sup>25</sup>と述べている。なお、竹岡正夫氏は「あの人との昔の恋愛」<sup>26</sup>と、片桐洋一氏は「あの人との過去」<sup>27</sup>

<sup>23</sup> 小町谷、同前掲注 7 書、p 126。

<sup>24</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 330。

<sup>25</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 374。

<sup>26</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1471。

<sup>27</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 791。

と解釈している。つまり、この歌の「古」は「恋人との昔」の意である。

つづいて、「なほたちかへる 心かな」という二句についてだが、松田氏は「昔に立ちかえってなつかしい気持ちになること」<sup>28</sup>と述べている。窪田氏は「〈なほ〉は、やはり、今は絶えているので、理としてはあるべくもないのの意」<sup>29</sup>と指摘した。片桐氏は「やはり、立ち戻っている」<sup>30</sup>と解釈した。つまり、この二句は、再び立ち返ったような気がするわが心だ、という意として理解できよう。

また、「たちかへる」という言葉は、『古今集』恋歌には、七三四の歌を含めて、五例ある。七三四の歌のほかの四首を次に挙げてみる。

立ちかへり あはれとぞ思ふ よそにても 人に心を おきつ白浪  
(古今・恋一・四七四、在原元方)

逢ふ事の なぎさにし寄る 浪なれば うらみてのみぞ 立ち帰りける  
(古今・恋三・六二六、在原元方)

石間ゆく 水の白浪 立ち返り かくこそは見め 飽かずもあるかな  
(古今・恋四・六八二、読人しらず)

わたつみの わが身越す浪 立ち返り 海人の住むてふ うらみつるかな  
(古今・恋五・八一六、読人しらず)

今上げた四首はいずれも「たちかへり」の縁語の「浪」が見られることが注目されよう。「浪」と「たちかへり」との関係については、松田真奈美氏は次のように述べている<sup>31</sup>。

<sup>28</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 374。

<sup>29</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 330。

<sup>30</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 791。

<sup>31</sup> 松本真奈美「百人一首ことばの手帖」(『國文學解釈と教材の研究—小倉百人一首』第 37 巻 1 号、学燈社、1992)。



四季歌での「波」は、「花」への見立てが重要な詠法といえる。一方、恋歌での主な表現機能としては、①縁語「浦見」（「恨み」と音声が共通）「立返る」などを導き、序歌乃至掛詞縁語仕立ての歌を構成する、②「涙」を暗示する、③「無み」を掛ける、などとあげられよう。（傍線は筆者によるものである。以下同）

つまり、「浪」が「たちかへり」を導くという詠法は、よくある恋歌に見られるものであるという。

また、四七四、六八二、八一六、の三首の「たちかへり」は「繰り返し、何回でも」の意として使われた<sup>32</sup>。六二六の歌は「立ち帰る」と「引き返す」の両義を運用している<sup>33</sup>。

ところが、貫之の七三四の歌には、「たちかへり」という言葉が認められるが、「浪」という縁語が認められない。また「たちかへり」の前句は「古に」なので、ここは「昔に立ち帰り」と解してよい。つまり、歌全体から見れば、「たちかへり」は「繰り返し」という意が読み取れなく、単に「立ち返り」の意として使われたのだと見てよかろう。

続いて、「恋しきことに もの忘れせで」という二句についてだが、松田氏は「恋しいということによって、物忘れしないで、恋しいという気持ちから、何もかも楽しく思い出されて、の意」<sup>34</sup>と指摘している。また、窪田氏は「恋しき事に困ってで、恋しいという事は、理を無視する意を持たせたもの」<sup>35</sup>と解釈している。片桐氏は「恋しいということにおいては物忘れしないで、〈他のことでは物忘れしても〉という句を補えば、よくわかる」<sup>36</sup>と指摘している。

つまり、この二句は「恋人への恋しさでは物忘れることはない」という意として捉えることができる。

---

<sup>32</sup> 四七四歌の解釈は、小沢正夫等校注・訳、同前掲注 14 書の頭注（p 198）によるものである。

六八二歌の解釈は、片桐、同前掲注 24 書の語釈（p 686）によるものである。

八一六歌の解釈は、片桐、同前掲注 24 書の語釈（p 963）によるものである。

<sup>33</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 571。

<sup>34</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 374。

<sup>35</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 330。

<sup>36</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 791。

以上の語釈をまとめれば、この歌は「過ぎ去ったあの人との過去にやはり立ち戻る私の心であることよ、あの人を恋しいということにおいては、物忘れするということもないので」<sup>37</sup>という意となろう。

さて、この歌の表現法はどうか。

この歌の発句は「古に」とあるように、「昔」の時間点が歌の最初に提起された。この「昔」は「恋人との昔」である。それに、次の句の「なほたちかへる」からは、「昔にもどりたい」という作者の心情が表現されている。このように考えると、この歌における「昔」とは懐かしい昔、忘れられない昔を意味しており、その昔という時点には忘れられない恋情があったと想定されよう。そして、この「昔」という時間点は第四句の「恋しきことに」では改めて提出され、「昔」のあの人への恋しさが表現されたのである。このように、「昔」という時間点は二回も指示されたことから、この歌の時間性が注目される必要があると認められよう。

一方、第二句と第三句の「なほたちかへる 心かな」とは「昔に立ちかえる私の心かな」という意のように、作者の「今」の希望（たち戻るという希望）を訴えたのである。また、最後の句である「もの忘れせで」とあるように、作者が「今」の時点に立ち、自分のあの人への忘れられないという心情を述べたのである。ここにおいて、この歌では「今」という時間点も二回示されていることが注目されよう。さらに、ここにおいて、「昔」と「今」という対照関係がこの歌にあったことが認められよう。

ところで、何故作者は、「今」から「昔」に戻りたいのか。それは、「昔」の思いが美しかったからであるに違いない。作者はこの「昔」の恋を懐かしく思っているのである。その反面では、「今」の二人の関係（既に親密ではなくなった）に対して、惜しんでいるだろうという作者の内面も読み取れよう。

このように、作者は、「昔」のことを提起しながらも、「今」の（昔に立ち返りたい）気持ちを表現しようとしているのである。このことから、「昔」のことを提起することによって、「今」の寂しさを伝えようとする意図も作者に

---

<sup>37</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 791。

はあると想定できよう。

以上のように、この節では、出逢った前の「昔」と逢ってから「今」という対照表現を探究してきた。

前述した六七八の歌も六七九の歌も、もし「昔」で逢わなかったら、という仮定を通して、「今」の恋しい情緒を語っているのである。作者は、その仮定を通して、出逢った前の「昔」の恋しい程度は、逢ってから「今」より低いことを示している。逆にいうと、逢ってから「今」は、激しく恋しいということである。一見して当たり前のことだが、作者は「昔と今」の恋しさの程度の違いを通し、「今」の恋しい心情を際立たせたのである。言い換えれば、作者は、「昔」のことを提起するのは、「今」の情緒を強調したいためであり、「昔と今」という対照表現は、こうした恋しい情緒を語るための存在なのだとと言えるのである。

## 第二節 愛し合った「昔」と、別れてからの「今」

さて、恋が消えて去って、恋しい人はもう目の前にいないとき、恋情のすべては思い出になろう。恋人の面影も記憶の中でしか探せないであろう。本節では、愛し合った「昔」と、別れてからの「今」との対照を通して、恋愛中の男女の心情変化を見てみたい。

このテーマについて七四七と七九〇との二首の歌を取り上げて分析したい。まず、七四七の歌から始めたい。この歌の詞書はかなり長いが、和歌の分析に関わるものなので、あげておく。

五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、睦月の十日余りになむ、ほかへ隠れにける、在り所は聞きけれど、え物も言はで、またの年の春、梅の花盛りに月のおもしろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対にいきて、月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる

### ③ 月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ わが身ひとつは もとの身にして

(古今・恋五・七四七、在原業平)

月よ、お前は去年の月と違うのか。春よ、お前は去年と同じ春ではないのか。あの人がいなくなったばかりに、すべては変わってしまい、かくいう私の身ひとつだけは去年と変わらず、もとのままであって。

つづいて、歌の分析に移る。

さて、「月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ」という三句をまとめて見てみたいが、まずは、「月」についてだが、山田洋嗣「歌語、歌枕事典」では次のように述べている<sup>38</sup>。

万葉集での月詠は、月の運行する姿を「渡る月」としてとらえることが多いが、古今集以後は「照る月」の明るさを詠むことが中心。「月影」とも詠まれた。(中略)「照る月を弓はりとしもいふことは山の端さしていればなりけり」(大和物語・一三二段 凡河内躬恒)のように「さす」「いる」や「あかし」「すむ」などを掛詞・縁語として詠じることがある。枕詞は「久方の」「ぬばたまの」。(中略) 月が人を感慨にふけらせるとする詠も多いが、同様に、旅や恋における月は、故郷・都・恋人を思わせるものとして、また、恋人の面影そのものとして詠まれ、袖に宿る月は涙を暗示する。

すなわち月は和歌においては常に、故郷・都・恋人を思わせるものとして用いられていたことが分かる。ほかに、「月」は満ち欠けの変化があるが、それは循環するものなので、全体からみれば、「月」は変わらないものと見てよからう。

「月やあらぬ」という句は「月や昔の月あらぬ」の略、すなわち「この月は昔の月ではないのか」の意である。つまり、月是不変なものはずだが、この歌で詠まれた「月」はもう変わった、今見ている月はもう昔の月と同じではない、

---

<sup>38</sup> 山田、同前掲注 75 論文。

という意である。

つづいて、「春や昔の 春あらぬ」の「春」についてだが、鈴木日出男氏は「〈春〉によって季節時間の推移を強調しながら、しかもその〈春〉に〈花〉を暗示させてはいる」<sup>39</sup>と指摘した。窪田氏は「〈春〉は、花を言いかえたもの」<sup>40</sup>と述べている。それに対し、竹岡氏は「この〈春〉を〈花〉〈梅〉など言い換えて解する必要はない」<sup>41</sup>と指摘した。つまり、この歌の「春」という言葉について、二説ある。「春」は「梅の花」を言い換えたものという説と、「春」は「梅の花」を言い換えたものでない、そのまま四季の「春」という意を解する説である。

ところが、「春や昔の 春ならぬ」という句の前句は「月やあらぬ」である。つまり、この二句の「春」は前句の「月」とは対照をなしているのである。「月」は自然現象を表わすものだが、「春」は季節を表わすものであり、「時間」なのである。ここでは、もし「春」を、「花」に言い換えることができると見れば、「春（花）」は前句の「月」と対応するものとなろう。すなわち、「月」と「春」は物物対照となっているのである。もしここでは「春」をそのまま四季の中の「春」と見れば、「月」と「春」は物と時間との対照となろう。ここでは、やはり物物の対照がより歌意に合うものと見てはよかろう。

さらに、この歌の詞書には「梅の花盛りに月のおもしろかりける夜」とあるように、「梅の花」のことが明記されている。したがって、ここでは、春の（梅）花説の方がより妥当だと見られまいか。要するに、ここにある「春」は春の花を象徴するものとして捉えられるのである。

さて、こういう春の花は、「月」とともに、不変なものとして見るべきである。「月」の循環性と同様に、花も散ってから、また咲く。咲いてから、また散る。花もこの不変の循環関係にあるものである。ここにおいて、「花」を「月」と同様に変わらぬものとして見るべきである。

つづいて、「月や」と「春や」という二つの「や」についてだが、「や」の

---

<sup>39</sup> 鈴木、同前掲注 3 書、p 579。

<sup>40</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 348。

<sup>41</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1494。

解釈もまた「春」と同様に、二説ある。従来の解釈では、「反語説」と「疑問説」とに分かれているものである。

反語説の代表として、窪田空穂、松田武夫、窪田章一郎三氏があげられよう。

窪田空穂氏は「〈や〉は反語」<sup>42</sup>と指摘している。また、松田武夫氏は「月は昔の月ではないか、いや」<sup>43</sup>と述べている。窪田章一郎氏は「〈や〉は反語と詠歎との解釈が行われているが、ここでは前者としておく。自然の月も花も変わらない意」<sup>44</sup>と説いた。

この三氏は反語説を主張し、「月やあらぬ春や昔の春あらぬ」を、月は昔のままの月、春は昔のままの春としている。すなわち、三氏とも自然が変わらないものという点に注目しているのである。

これに対し、疑問説を主張するのは、『全集』と、片桐洋一、上田三四二、竹岡正夫三氏である。『全集』には「〈や〉は月に問いかける意、次の句の〈や〉も同様」<sup>45</sup>と述べている。片桐氏は「月は昔の月ではないのか」<sup>46</sup>と指摘している。また、上田氏は「〈や〉は疑問だろう、反語では叙事的になりすぎる」<sup>47</sup>と説いており、竹岡氏は「この歌は、自問自答の独詠であるから、一々反語まで強く解する必要はない」<sup>48</sup>としているのである。

すなわち、疑問説とは月と春は昔のままであるかを問いかけているものと見られる。

この二説に関して中川正美氏は次のようにまとめている。

(1) 疑問説は我身を月や春の自然と対比し、(2) 反語説は我身と他者を対比している。つまり、(1)は『八代集抄』が「わが心の思ひなしに変はらぬものも変はりておぼゆる」と説くように、自然も我身も変わらないのに、自然が変わったと感じると解し、(2)

<sup>42</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 348。

<sup>43</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 396。

<sup>44</sup> 窪田章一郎『和歌鑑賞事典』(東京堂出版、1970) p 261。

<sup>45</sup> 小沢正夫等校注・訳、同前掲注 14 書の頭注 (p 287) による。

<sup>46</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 823。

<sup>47</sup> 上田三四二「愛の詞華集」(『國文學解釈と教材の研究—〈愛〉の古典文学—男と女』第 26 巻 5 号、学燈社、1981)。

<sup>48</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1494。

は④自然は変わらず我身も変わらない、ただ恋人、あるいは境遇が変わったと解するものと、⑤漢詩の発想「年々歳々花相似、歳々年々不同人」を持ち込み、自然は変わらないが人事は変っていくものだ、それなのに、我身だけが変わらないとするものに分かれる。

氏のまとめを踏まえれば、すなわち、疑問説とは自然が変わったという理解の仕方であり、反語説は自然が変わらないという見方なのだという。

ところで、この歌では「わが身がひとつはもとの身にして」とあるように、わが身が「もと」と同様な状態にあると語られている。すなわち、ここにおいて、わが身は昔と同じく、変わらないままであることが強調されているのである。もし「月やあらぬ春や昔の春あらぬ」の「や」は自然が変わらないという反語の意味であれば、「月」も「春」も「わが身」も全て変わらぬものという意となろう。そうすれば、この歌は、所詮「わが身」も「月」と「春」と同様に変わらないものだと言ふことになる。歌全体から見れば、「や」の反語説が道理に合わないと言わなければならない。やはり「や」は疑問であって、「月」と「春」はすべて変わったが、「わが身」だけが昔のまま、あなたのことを思っていると解釈しなくてはならない。したがって、ここでは、疑問説に採りたい。

以上の解釈をまとめてみると、この歌は「この月は去年の月ではないのか、この春は去年の春ではないのか、私の身だけが去年のままにとり残されていて、他のすべてはすっかり変ってしまった感じであるよ」<sup>49</sup>ということとなろう。

さて、この歌の表現に関しては、様々な論説が見られる。たとえば、鈴木宏子氏は、

独詠歌であり、恋人は既に遠い人となって思いを訴える術はない状況の歌であり、早春の自然と恋を失った自身を対比し、循環する四季の時間から置き去りにされた孤独な我が身を擬視するの

---

<sup>49</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 822。

である。

と指摘した<sup>50</sup>。氏はこの歌を「自然と我が身と対比する」と見ているのである。

また、鈴木日出男氏は次のように指摘している<sup>51</sup>。

同類語の反復や照応は、明らかに漢詩の対句・対照などの語法の影響によっていよう。(中略)「月やあらぬ…」の歌では「月やあらぬ」「春や昔の春あらぬ」のくどいまでの重畳に、不変であるはずの天然自然の運行をあえて疑わざるをえない気持をこめて、それに自己の肉体一つだけが確かであるとする認識を対比させるところから、逆に己が心の分裂と彷徨が切実なものとして詠嘆されている。

鈴木氏は、この歌には対照の語法があり、それに「自然と自己との対比」があると見ている。

また、前述したように、中川氏は「や」に関して、「疑問説は我身を月や春の自然と対比し、反語説は我身と他者を対比している」と指摘した。ここにおいて、疑問説にせよ、反語説にせよ、いずれも「対比」という手法が用いられていると氏が見ている。。このように、対比という概念と手法はこの歌を詠むとき、注意を払うべき点であろう。

ところが、そして、三氏が指摘した「対比」は、いずれも「我が身」と「自然」との対比なのである。すなわち、「月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ」とは「自然」であり、「わが身ひとつは もとの身にして」とは「我が身」であると三氏が見ているのであろう。

しかし、この歌最初は、「この月は昔の月ではないのか、この春は昔の春ではないのか」と、二つの疑問が提出された。この二つの質問では、「昔」という言葉が重複されている。また、下の二句には「私の身だけが昔のままで変っ

---

<sup>50</sup> 鈴木、同前掲注2書、p157。

<sup>51</sup> 鈴木、同前掲注3書、p576。



ていない」と、「昔」という用語が改めて用いられた。歌全体においては、「昔」という時点が三回も提起されていることに注目を払う必要がある。

しかし一方、「月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ」との三句は作者が現時点の月と春を対象として発問したものである。「わが身ひとつは もとの身にして」という二句も、私の身だけが昔のままで変わっていないという「今」の気持ちを強調しているのである。要するに、この歌において、作者は「今」の景物に面する際に、「昔」の情景を懐かしみ、さらに、今の心境を強調することなのである。このように理解すれば、この歌の重点は「自然」と「わが身」との対照ではなく、「昔」と「今」との対照と見なければならないのではないか。そして、このような対照的な手法を通して、作者はわが身の一つを強調し、恋人不在の悲しみと寂しさを伝えようとしていると見られよう。

また、この歌で「今」の景物に面する際に、「昔」の情景を懐かしむという表現は、『古今集』恋歌の他の歌にも見られる。

今はとて 君がかれなば 我が宿の 花をばひとり 見てや偲ばむ  
(古今・恋五・八〇〇、読人知らず)

この歌の「我が宿の 花をばひとり 見てや偲ばむ」との三句は、「今」の一人の状態を説明したのみならず、「昔」の二人で花を見たことも暗示した。「見てや偲ばむ」は「今」の目の前の花を見て、「昔」の仲を偲ぶのであろう。こういう表現は、七四七の歌の「月やあらぬ 春や昔の 春あらぬ」、即ち、月と春に問いかける表現とは類似している。七四七の歌の月も花も、「昔」にあの人と一緒に見たので、あの人不在の「今」には、「昔」の共有した記憶によって、「今」の悲しみ、「昔」への懐かしみが表現されているのである。

この手法は八〇〇の歌にも認められる。作者は相手が離れた「今」という時点に立って、「昔」のことを偲んでいるのである。すなわち、「今」の目の前の花は、「昔」のとき、二人で一緒に見たのである。ここでは、八〇〇の歌は七四七の歌と同様に、「昔」のことを懐かしむことによって、「今」の切なさという情緒を強調する歌なのだと思われる。したがって、この歌の中でも「昔

と今」という対照表現が存在していると指摘できよう。

次は④の歌の検討に入りたい。改めて歌を挙げておく。

あひ知れりける人の、やうやくかれがたになりけるあひだに、焼けたる茅の  
葉に、ふみを挿してつかわせりける。

④ 時過ぎて かれゆく小野の 浅茅には 今は思ひぞ 絶えずもえける  
(古今・恋五・七九〇、小野小町姉)

季節が過ぎて枯れてゆく野原の浅茅に、今は野焼きの火が絶えず燃えて  
います。盛りを過ぎた私にはあなたの訪れが遠のきがちですが、私の心  
にもあなたに対する「思ひ」の火が絶えることなく燃えているのです。

以下は先行研究による歌の解釈を踏まえながら、歌の解釈を試みたいと思  
う。

まずは、「時過ぎて」という句を見てみたいが、この句について、竹岡氏は  
この語句には表面的意味と裏の意味とがあると指摘している。表面的意味とは、  
「ちがやの盛りの時期が過ぎて」の意である。裏の意味には両解があり、一つ  
は「相手（男）の自分への愛情の時期が過ぎて」という意であり、もう一つは  
「自分の齢がたけ、容色の盛りの時期が過ぎて」という意なのである<sup>52</sup>。

竹岡氏の指摘に対して、松田氏はただ「盛りの時期が過ぎて」と解釈し、盛  
りの時期の主語を提示しなかった<sup>53</sup>。なお、片桐氏はそれが「時節が過ぎて」  
の意と「時めく状態が過ぎて」の意を掛けるとする<sup>54</sup>。『全集』には「自分の  
容色の盛りの時期が過ぎて」と解している<sup>55</sup>。

以上の諸説をまとめれば、「時過ぎて」の主語が①ちがや②男からの愛情③  
自分の容色、この三つの解釈が認められる。

一方、下二句の「今は思ひぞ絶えずもえける」には、相手への愛が絶えずに  
今も燃えていることが物語られているのである。すなわち、主人公が愛されて

<sup>52</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1563。

<sup>53</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 451。

<sup>54</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 911。

<sup>55</sup> この解釈は小沢正夫等校注・訳、同前掲注 14 書（p 300）による。

いた時も、離れていった今も、「私」があの人を愛し続けているということである。この二句から見れば、「時過ぎて」は浅茅のことを指すだけでなく、②の「男からの愛情」が過ぎたと解釈した方が歌意に合うのであろう。

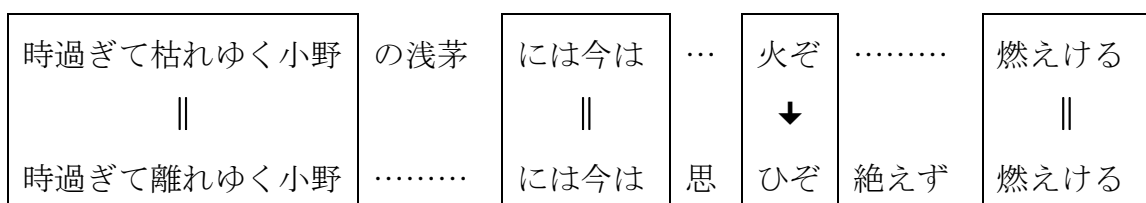
また、「かれゆく小野の」という句についてだが、ここにある「小野」とは作者の姓と掛けており、作者を響かせる<sup>56</sup>か、作者自身を喩えたもの<sup>57</sup>と考えられている。「かれゆく」とは「枯れゆく」と「離れゆく」との意味とされている<sup>58</sup>。

なお、「思ひぞ絶えずもえける」の「思ひ」は「火」を掛けている。それに、「火」は「燃える」の縁語である。すなわち、ここでは「思ひ←ひ（火）→燃える」という関係となっており、あの人を思うという「思い」の「火」が胸で燃えているという意という心情が物語られているのである。

以上のように考えると、この歌は次のように考えられよう。

すなわち、この歌、外の意としては時節が過ぎて、つまり秋になって、枯れてしまった小野の浅茅が、今、春の初めに、野焼きのために燃えているという景を詠みつつ、内面では「時過ぎて」によって、「時ある」状態が終わって、つまり愛する気持ちがなくなって男が離れてゆく私の所では、今や、「思ひ」の「火」が耐えることなく燃えているとうらんでいるのである<sup>59</sup>。

さて、この歌について、竹岡氏は「茅」の表現と、自分についての表現と重複して二重映しになっていると指摘し、次の構造図を提出した<sup>60</sup>。



<sup>56</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 911。

<sup>57</sup> 松田、同前掲注 33 書、p 452。

<sup>58</sup> 窪田、同前掲注 27 書、p 395。

松田、同前掲注 33 書、p 451。

竹岡、同前掲注 35 書、p 1563。

片桐、同前掲注 24 書、p 911。

<sup>59</sup> 片桐、同前掲注 24 書、p 912。

<sup>60</sup> 竹岡、同前掲注 35 書、p 1563。

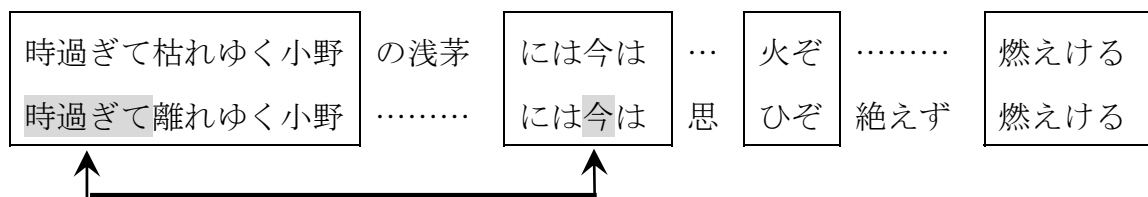
矢印の所は歌語の意味の転換を意味している。ここでは、浅茅が火によって燃えていることと、あの人への思「ひ」が絶えずに燃えることという二重の意味を示している。

さて、この構造図について、筆者は特に注目したいのは「昔と今」という対照関係である。

前述したように、「時過ぎて」という語句の内面には「男からの愛情」が過ぎたという意が含まれている。すなわち、あの人に愛される時が過ぎたことは、既に「昔」のことになったのである。それに対し、「今」の頃は、また思いの火が絶えず燃えている。あの人がもう離れていったが、胸の中にはあの人への思いがまだ続いている。この歌にある「絶えず」とは、「昔」と「今」の情景は違うけれども、私の心や思いはやはり同じであるという意味を強調している。ここにおいて、「昔と今」という対照から、終焉を迎えた恋に対しての未練を感じさせる。

言い換えれば、この歌は、季節も景物もあの人のも心も変わったにもかかわらず、私の思いはやはり変わらないことを語っているものである。ここでは、恋愛過程においての変わるものと、変わらないものが「昔と今」という対照によって、一層鮮明に描きあげられている。もし、ここでは単に「今」の状況が述べられるならば、あの人不在の悲しさはこれほど深刻に表現されることができないであろう。愛されていた「昔」のことも詠まれているから、愛されていない「今」の切なさや孤独感が鮮明になるものである。このことから、「昔と今」という対照的關係は、恋の切なさや苦しさを表現することに重要な働きをしているといえよう。

以上のように考えてくると、この歌の構図は次のように捉えてよかろう。



本節は上掲の二首を通して、愛し合った「昔」と、別れてからの「今」という対照表現を探究した。

前述した歌から、愛し合った「昔」の美しさと、別れてからの「今」の切なさが一首の歌の中に融合されることが分かる。何故「昔」のことを話すか。やはり「昔」のことを通して、「今」の情緒や決意を表現するためだと考えられよう。作者は愛し合った「昔」の恋しさと、別れてからの「今」との対照関係を通し、「今」の忘れられない気持ち、忘れない決意を示しているのである。また、「昔」の状況と心境を、「今」の状況と心境とを対照することによって作者は見事に「今」の重い悲しみを描きあげたのである。

要するに、「昔と今」という対照表現を通して、別れてからの「今」の辛さが強調されたのだと認められるのである。

### 第三節 まとめ

本章は「昔」と「今」に関する対照表現から、『古今集』恋歌を分析してきた。

以上の考察結果をまとめると、次のようになるろう。

すなわち、上に挙げた歌々は、出逢った前の「昔」と、逢ってから「今」との対照的關係においては、「昔」と「今」におけるあの人への恋しさの程度の違いを通して、「今」の恋しい心境が表されたのである。あの人への恋しさについては、出逢った前の「昔」と、逢ってから「今」との違いは、厳密にいうと、程度の違いだが、こういう違いさえも、対照関係になれる。というのは、逢ってから「今」の恋しさがどんなに深いかは、出逢った前の「昔」の情緒との比較によって、明確に読み取ることができるからである。言い換えれば、出逢った前の「昔」の情緒が提起されることによって、比較の基準が出来て、「今」の情緒の度合いが分かりやすくなるからである。したがって、出逢った前の「昔」と、逢ってから「今」とは比較できるものとなり、両者は対照的關係をなしているのである。

これに対して、愛し合った「昔」と、別れてからの「今」という対照的關係においては、「昔と今」という対照表現を通して、別れてからの「今」の辛さが強調されたのである。愛し合った「昔」とは、愛された時であり、今でも懐かしく思っているいい思い出を指しているのであろう。別れてからの「今」とは、寂しくて一人ぼっちの辛い状態を意味していよう。愛し合った「昔」と、別れてからの「今」との間には強い対照的關係が存在していることが認められよう。この対照的關係を通して、別れてからの「今」の切なさが表現されているのである。

このように、「昔と今」という対照には様々な情緒が秘められているのである。このような対照方法を通して、恋愛中の男女の心情の諸相が表現されている。また、「出逢った前の昔と逢ってからの今」との対照でも、「愛し合った昔と別れてからの今」との対照でも、作者の強調したいのは「今」の心情なのだと察せられる。男女主人公はもう逢えたか、あるいは別れたかに関わらず、作者は、「昔」の状況や心境などを語ることを通して、「今」の情緒を強調するという手法は歌にはあったと認められる。『古今集』恋歌はこうして、「昔」よりも「今」の心境を大事にしたからこそ、「今」の辛さ、悩み、切なさをリアリティックに読み手に伝えることができたのではないか。